

## インドの医療事情

櫻井 孝

異国で暮らす際に一番不安なことは、やはり怪我や病気にかかることであろう。特に小さい子供の場合は余計に心労が増す。インド大使館には幸い医務官が派遣されていたが、当時はパキスタン大使館と兼務でときどき出張していたし、医務官の専門外の病気にかかることもあったから、現地の医者や病院に行かねばならないこともあった。終わってしまえば懐かしい思い出のひとつだが、今回は医療に関するインドでの体験談をご紹介します。

なお、医療に関係する適当なインド切手は見当たらなかったため、今回は切手は切手、お話はお話と割り切り、それぞれにお楽しみいただければと思う。

■内科 インドに行くときたいの日本人がひどい下痢症状に見舞われると言われる。これは本来はインドに限ったことではなく、異国の地に行くと水が変わると、その水に適した腸内細菌に入れ替わるまでの間下痢症状が出るものだと思うのだが、それにしてもインドの場合はよく話題にのぼる。インドに出張したものの、翌日からひどい下痢症状が出て数日ホテルから出られず、結局仕事にならないまま帰国した人の話は複数例聞いたことがある。

かくいう自分も、インドに到着して10日ほどしてそういう状況に追い込まれた。日本から持って行った薬などは全く役に立たない。出勤しても、しょっちゅうトイレに駆け込んでいて仕事にならない。不幸なことにそのとき医務官殿はパキスタン大使館に出張していて、診てもらうこともできなかった。苦悶の状況が1週間ほど続いたであろうか、ようやく医務官殿が出張から戻って来たのでさっそく朝一で診ていただいたところ、「これは難儀したね」と言って、小さくて白い丸薬をくれた。毎食後に1粒飲むとのこと、さっそくお昼に飲んだところ、うそのように下痢が止まった。この驚きと喜びは体験した者でなければ到底理解できない。

このありがたい丸薬であるが、その後もインド滞在中に何回もお世話になった。そのたびによく効いた。職場の同僚の話によれば、その薬は米国のNASAが開発したものとことだった。宇宙飛行士が宇宙で下痢になったらいいんだということで開発されたクスリなんだ、という説明であった。いかにも説得力があり、その話を聞いた者はみんな「お～、なるほど！」と納得したものだが、真偽のほどは定かではない。その同僚氏は、つまらない話もうまく脚色して仲間を笑わせる名人であったから、それも彼の創作に

よるものだったのかも知れない。

■歯科 歯が痛くなるのはやっかいである。特に衛生面で心配のある国では、地元の歯医者にかかるのはあまり勧められたものではないだろう。

自分の長男は当時小学生で、伝統あるニューデリー日本人学校（どうやら世界中で一番長い歴史を持つ日本人学校らしい）に通っていた。その長男が学校の庭で遊んでいたときに、ころび、運悪く永久歯の前歯を敷石にぶつけて折ってしまった。ちょうど自分の健康管理休暇が認められる時期であったため、急遽休暇を申請して一家で日本に帰国し、歯医者さんに無理をお願いして2週間で集中治療してもらって帰任した。当時は、健康管理休暇で日本に帰国することは認められないとの話だったが、さすがに事情を説明したら特例で帰国を認めてくれた。せっかくの休暇がつぶれたのは痛かったが、日本でしっかり治療ができたことは幸運であったと思っている。

ただ、そう都合良く休暇の時期に当たるとも限らない。現地の歯医者に通って歯の治療をしてもらった猛者がいた。前出の同僚氏である。

あるとき、職場で左のほっぺを押さえながらしきりに痛がっているの、どうしたんだと聞いたら、現地の歯医者に行ってきたとのこと。聞けば、あのキーンと鋭い音を立てる回転切削工具の水が出ないのに、無理矢理歯を削られたんだそうだ。インドでは停電や断水は日常茶飯事という状況だから、水が出ないというリスクは当然に考えるべきだったかもしれない。同僚氏はさすがに痛いと言ったそうだが、インド人の歯医者は「ノー・プロブレム！」と言って麻酔もかけずにガリガリ削ったんだそうだ。「口から火花が飛び出た」と言っていたが、それは彼の脚色かも知れない。海外に赴任するに際しては、しっかり歯の治療をしてから行った方がよさそうである。

■眼科 当時、次男は4歳、娘は2歳だったと思う。休日に自宅のリビングで2人でじゃれあって遊んでいるうちに、次男の持っていたおもちゃが娘の目に当たってしまった。娘は痛がって泣きじゃくるし、白目の部分から出血があり、これはたいへんだということで直ちに地元の眼科医に連れて行った。

眼科医はよく診てくれて、傷もひどくないから心配は要らないとのこと、念のため抗生物質入りの目薬を処方してくれた。インドは医薬分業制が確立していて、医者のところでは薬はもらえない。近くの薬局に行って処方箋を見せ、

薬を買うことになる。で、薬局に行って処方箋を見せたら、すぐに小瓶に入った目薬を出してくれた。日本のように健康保険など効かないから、料金はさぞかし高いのかと思ったら、なんと5ルピー(当時のレートで25円!)であった。ちゃんときれいな箱に入っているし、ビンもしっかりしている。それでいて抗生物質入りの目薬がたったの25円! 容器代にもならないじゃないかとびっくりした。

もちろん、我々にとっては安いと感じても、インドの一般大衆にしてみれば5ルピーはほどほどに高価である。実体験としてインドの医薬品事情の難しさの一端を垣間見た気がした。

ちょうどその頃、TRIPSの議論が進んでいて、任国の事情を本国に報告しなければならないことになった。自分は自信を持って、インドの一般大衆の所得水準からみたら医薬品の価格は低く抑えざるを得ない、この社会事情の観点からすればインド政府がTRIPSに入ると決断することはできない、と報告を送った。この見立ては、自分が帰国したあとに見事に外れる。インドはTRIPSを受け入れたのだ。もちろんその後議会で法案審議がうまく進まず、相当な紆余曲折はあったのだが、とにかくインドがTRIPSに入ったというニュースを聞いたとき、自分は愕然としたことを覚えている。苦い思い出である。

■外科 外科というと大げさかも知れないが、これは次男がインドで全身麻酔をかけられて手術をしたというお話。

いよいよ帰国を3ヶ月後に控えたという時期だったが、次男に話しかけても反応が遅いことがある。おかしいと思って医務官殿に相談したら、滲出性中耳炎で、鼓膜の内側に水がたまり、それで耳の聞こえが悪くなっているんだとの診断結果であった。処置としては、肥大して耳管を圧迫しているアデノイドを切除し、鼓膜に開穴して中の水を抜いた後はその穴にチューブを挿入して鼓膜内外の圧力を同じにさせる、とのこと。まだ5歳と小さいこともあって、手

術は全身麻酔でせざるを得ない、と言われた。インドの医薬品は一般的に日本よりも効きが強いという噂を聞いていたから、麻酔薬も安心はできない。それはリスクだから3ヶ月我慢して帰国したあとで日本で手術したいと言ってみたのだが、3ヶ月も今のままにしておいたら難聴になる、インドでもその程度の手術は問題なくできる、と説得され、インドで手術をすることになった。

インドの公立病院は足の踏み場もないほど患者が来ていて、かえって他の病気をもらいかねない、と聞いていた。しかし、それは治療費が安く済む公立病院の話で、富裕層や外国人が診てもらおう個人医院は極めてきれいだ。庭も広くて気持ちがよい。次男を連れて行った医院も、我々以外には患者は誰もいなかった。そのうち、外から麻酔専門の医師がやってきて次男のおしりに麻酔薬を注射したら、それまで泣き叫んでいた次男はがっくりと動かなくなり、手術室に連れて行かれた。このまま意識が戻らなかつたらどうしようと心配しながら手術室の外で待っていたが、ほどなくして手術は無事に終わったと医師が抱いて出てきた。

自分も6歳のときに扁桃腺とアデノイドを切除した経験がある。そのときのことは今でもよく覚えているが、手術のあとは喉の痛みで3日間は何も食べられなかった。だから次男もしばらくは何も食べられないかと思っていたのだが、なんと自宅に戻り麻酔が切れて目が覚めたら、痛いとは一言も言わず、逆にお腹がすいたとすぐに食事を始めたのである。これには驚かされた。インドの魔法かと思った。

帰国してからすぐに耳鼻科に連れて行って事情を説明し、診てもらったのだが、手術はしっかりされているとのことで、それ以降ぶり返すこともなかった。鼓膜に取り付けたチューブはその後知らないうちに外れて落ち、鼓膜の穴も自然に塞がっている。

とにかく今は、日本語で医者にかかれる日本に住んでいることに幸せを感じている。



【図1】インドの国旗。サフラン、白、緑の三色で、中央にチャクラ(宝輪)を配す。1931年にインド国民会議派が採用した旗では、中央のチャクラの部分にインド独立運動のシンボルとされた糸車(紡績機)が描かれていた。その旗がインド国旗の基となったと言われている。インドは、この切手の中にも記載されているように、1947年8月15日に独立を果たした。この切手は、その独立を記念した3種の切手のうちの1枚で、インド独立後初めて発行された切手。1947年11月21日発行(ギボンズ#302)



【図2】1942年8月にボンベイにて開催されたAll India Congress Committee (AICC)を記念した切手。マハトマ・ガンディーの背後に掲げられた旗がインド国旗の基になったと言われているもの。1983年8月9日発行(ギボンズ#1091)



【図3】ご存知、インド独立の父、マハトマ・ガンディー。「マハトマ」とは、偉大なる魂という意味。インド独立後の1948年1月30日、狂信的なヒンドゥー至上主義者の手によって暗殺された。享年78歳。この切手は、第1回独立記念日である1948年8月15日に発行された4種の切手の1枚。特別の紙を使い、スイスの切手印刷業者によって印刷された。(ギボンズ#308)